
こころ～希望

華山楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こころゝ希望

【Nコード】

N4462S

【作者名】

華山楽

【あらすじ】

初代の天空と嵐の会話です。捏造あります。ご注意ください。

（前書き）

発作的に書きたくなり、一気に書いたものです。

「引退し日本で余生を過ごすことにした」

晴天の元『大空』に呼び出された『嵐』は雑談後に言われた言葉で固まった。

「…は？」

「大まかな段取りはすでに終わっている、後は詰めただけだ」

『大空』はそんな『嵐』を気にも留めずに話を続けた。

「何を言っているんだ。やっとボンゴレが組織として、押さえとして機能してきたばかりだろうが！」

やっと回復した『嵐』が言った。

もともと自警団であったボンゴレが大きくなり、組織としての体裁をととのえ、この地で悪事を働くもの達への抑止力としての存在となってきたばかりだ。

「だからこそ、だ」

今まで目を見て話していた『大空』の視線が僅かに逸らされた。

「…何考えてやがる」

「俺の役割は終わった、と言うことだ。後は、俺の次代に任せる」

「次代？ 弟のことか？ あいつに何を期待してやがる」

『大空』の弟が後継者となっていることは知れ渡っている。

しかし、人を力で押さえつけるところがある。

人に恐怖を植え付け支配していく。

それが、『大空』の弟だ。

『大空』とはまったく違う考え方しか出来ない。

「そうではない。アレにはアレなりに期待をしているが、俺の言っている次代ではない」

時には恐怖が必要だということは、今までの経験から『大空』は、いや『嵐』や他の守護者も知っている。

そして、『大空』が知っていながら極力それを使わないようにし

ていたことも。

「どういうことだ？」

次代とは『次』と言うことだ。

弟ではないのなら、誰のことを言っているのだろう。

「未だ生まれていない、いや、生まれてくるかすらわからない存在
…それが、俺の言う次代だ」

『大空』は遠くを見つめ、語った。

「『生まれてくるかすらわからない』だと？」

「ああ、俺の『心』と『思い』を受け継ぐ子だ」

わからないと言いつつその言葉は、確信していた。

それが『大空』の一族に伝わる超直感のなせることなのかは『嵐』
にはわからない。

「生まれてくるか解らないのに、随分と期待してるじゃないか」

「ああ、解らないが、きつと生まれてくる…歪みを正すことが出来る子だ」

「『歪み』…」

その言葉を聞いたとき『嵐』の脳裏に一人の男が浮かんだ。

自らボンゴレに、いや、『大空』に膝を折ったにも拘らず『大空』
を影から裏切っているあの男を。

「そうだ、ボンゴレは動き出した。だが、その流れは俺が望んでいた
流れとは違ってきている…」

その男の裏切りを読み、先手を打ち、時にその男に気が付かれな
い様に裏切りを無意味の物としてきた。

だが、それにも限界がある。

「『霧』か…」

唸るように『嵐』が言った。

「そうだとも言えるし、そうではないとも言える」

「ちつ、正せばいいじゃないか！次代なんて待たないでおまえ自身
が、ボンゴレを正せばいいじゃないか！」

『嵐』がいきり立ち『大空』に詰め寄った。

「…それは出来ない…」

『大空』の目に悲しみが宿った。

「なぜだ？俺達じゃあ力になれないのか？何も出来ないのか？」

「いや、俺の力不足だ…こうなる前に止められなかった…もう俺に正すことは出来ない…」

「お前に出来ないことを、出来る奴が生まれてくるのか？」

『大空』に肩をたたかれ何とか落ち着きを取り戻した『嵐』が言った。

「きつと、いや…絶対だ、何世代先になるかわ解らないが、生まれてくる、ボンゴレの歪みを正し、ボンゴレを導く者が」

遠い未来。

大きな力を持つ者が。

「…俺達にはもう何も出来ないのか？」

「いや、皆にはそれぞれ役割がある。『雲』は門外顧問に徹してもらいたい。『雷』はここで培ったことを生かし父親の後を継ぎいい地主になってもらいたい。『晴れ』はあの教会で弱った人々を守ってほしい…」

『雲』が創設した門外顧問は、ボンゴレの影響をほとんど受けない。

ボンゴレでありながらボンゴレではない組織。

その基盤は未だ完成していない。

完成させ、ボンゴレがあり続ける限り存在する組織とすること。

それが『雲』に今、『大空』が望むことだ。

『雷』は大地主の息子だ。

その土地には大勢の人々が住んでいる。

治める者がきちんと治めればそこは、平和で豊かな土地となる。

そんな、地主になっていく事こそが『雷』に『大空』が望むことだ。

『晴れ』には教会がある。

そこには争いで家族や友を失った者や、体や心が傷ついた者が集まってくる。

その者たちの傷を手当てし、心を癒すために全力を尽くす。

大勢の人間の心のよりどころとなることが『晴れ』に『大空』が望むことだ。

「・・・・・・」

「『雨』には共に日本に渡ってもらって…迷惑をかけるだろうが…」

『外』から来たものを恐らく『雨』の故郷は安易には受け入れないだろう。

しかし、『大空』はここを、この国を離れなくてはならない。

「俺と『霧』は？」

「『嵐』お前には、不本意ではあると思うが、門外顧問に入ってもらいたい」

「なぜ！」

落ち着いていた『嵐』が再び声を荒げた。

『嵐』と『大空』は幼馴染で親友だ。

ずっと一緒にいた。

それなのに離れると行っているのだ。

『大空』を第一にしている『嵐』にしてみれば、それは絶望ではない。

「そして、そして…知らせしてほしい…俺の家族であるボンゴレの状況を…東の最果てまでは愛する家族のことは、そうでもしないと耳に入らないだろう…」

『嵐』の心は恐らく『大空』はわかっているだろう。

しかし、『大空』はボンゴレを離れても弟や次代に期待していても、愛しているのだ。

ボンゴレを、そこに集った仲間を。

助け、守ってきた人々を。

「……………」

「…そして『霧』は二世の『霧』になる」
「なっ！」

「すでに、それは決定している…」

弟の守護者。

その中に『大空』の『霧』の姿があった。

「…裏切り者め…」

「仕方がない、全て、最初から分かっていたことだ。あいつの理想と俺の理想が180度違うことは…」

『霧』の理想に近い『大空』は一世ではなく二世なのだろう。

「…はい」

『大空』に近い誰もが知っていた。

いや、わかっていた。

いつか『霧』は決定的な裏切り者になることを。

「…渋っていた弟に俺の『霧』を守護者に薦めたのは俺自身だ。アレは一人にはいけない。不安要素だろうが、組織の中に入れておかなくてはならない。…お前と『霧』以外にはすでに話をつけてある」

「…はい」

『霧』は『大空』がいなくなったら勝手にやるだろう。

『霧』を組織の外、誰も見ていないところにおいては何をするかわからない。

しかし、組織の中に居れば裏で暗躍することはあるがその行動には少なからず制約が出来る。

ボンゴレという鎖を『霧』に、恐らくそれが『大空』が弟に二世に望んだことなのだろう。

そして『嵐』はそれを理解した。

「承知してくれるか？」

「…ああ、承知した。伝えてやる、全てを」

『大空』の思いを理解し、『嵐』は顔を伏せ、声を僅かに震わせながら了承した。

「ありがとう」

「いつ、発つ」

「弟に引継ぎを済ませてからになるからな…来月にはここを発つだろっ」

来月、けして長いとはいえない時間。

恐らく『嵐』にとってその時間は瞬く間に過ぎていつてしまっだらう。

「…わかった」

『嵐』が立ち上がった。

「…苦労をかける」

『大空』が穏やかに言った。

「慣れたさ。お前はいつも自分の思うとおりにやってきた。止められたためしなんざ無いからな」

「そうか？」

『大空』の幼馴染でもある『嵐』は幼い頃の『大空』を思い出した。

自分の思ったこと、決めたことを遣り通す意思の強さがあった。

誰かのためなら危険に自ら飛び込む無鉄砲さ。

自分に厳しく他者に甘く、そして、多くの事を人を受け入れてきた。

『嵐』が何を言っても、何をやってその性格だけは直らなかった。だから、今回も何を言っても無駄なのだ。

それが『大空』なのだから。

「自覚なしか。まったく…後悔は無いのか」

『大空』に背を向け、『嵐』が問うた。

「『後悔しているか』、と問われれば『是^ぜ』と答えよう。しかし、

やるだけの事はやってきたつもりだ。その時その時最善のことをな
「ああ…」

「だから『やり直したいか』と問われれば『否^{いな}』と答えよう」

『大空』の答え。

『嵐』はそれをうれしく思った。

『やり直す』と言うことは、自分達の今までを否定すると言っているとだからだ。

「そうか、ならいい」

「お前に、お前達に出会えたこの人生を誇りに思おう」

その場から去ろうとしている『嵐』に『大空』は言った。

「…俺もだ、会えてよかった。ここまで共に歩んでこられて良かった」

背を向けたままだが『嵐』もそれに答え、去っていった。

そして『大空』は愛するモノから去っていった。

東の最果ての地。

そこで『大空』と『雨』はその血筋を残した。

そして、『晴れ』の子が『雲』の孫が時は違うがその地に降り立ち血筋を残していった。

『大空』が去った地では『嵐』『霧』『雷』の血筋が交わることなく続いていった。

それぞれの血を持つ者が出会その時代『大空』の『心』と『思い』を受け継ぐ子が生まれる。

次代が生まれる・・・

（後書き）

おかしいところがあったら指摘してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4462s/>

こころ～希望

2011年10月5日14時27分発行